2017.5.22
（第３種郵便物認可）
日本教育新聞

「いのちの授業」に本気で取り組む

人としての在り方伝え 人生「100年時代」の礎に

鈴木中人・NPO法人いのちをバトンタッチする会代表

いじめに関わる法律が整備され、道徳が教科化されたが、いじめによる自死は後を絶たない。新校長への伝言の最後は、小児がんで小学1年生の娘を亡くした経験を基に、全国各地で「いのちの授業」を展開する鈴木中人・NPO法人いのちをバトンタッチする会代表にメッセージを寄せてもらった。鈴木代表の活動等は30年度の小学校道徳教科書（「学研教育みらい」3、6年）に掲載されている。

新しく校長になった皆さんに自問してほしいのは、①教育目標と経営方針に「いのち」の言葉があるか②校長として「いのち」をどう受け止めているかである。それは、「心の温度」である。低温では児童・生徒の心を芽吹かせることはできない。

私からは「いのちの教育」に取り組むポイントを述べてみたい。

◆その意味を心に刻む

児童・生徒は、学校で学んだことを糧に「100年時代」の人生を歩んでいく。100年後も、人として生きるために大切な心根を育むことが学校教育の使命である。

お金・名誉・家族・仕事・いのち。

人生で一番大切なものは何かと問われると、いのち・家族と答える人が大多数である。いのちへの確かな思いが、その人の生きざま、家族の絆、社会のありようになっていく。いのちの教育は、100年の人づくりの大原点。学校経営の真ん中に位置付けてほしい。

◆本気で思いを語る

これまで「いのちの授業」の実践を通して、千人近い校長の思いを聴いた。

ある中学校の校長は、終業式でいつもこんな言葉を投げ掛けている。

「校長先生より絶対早く死んではいけない。始業式で元気に会えるように」

教職人生の中で、事故で2人、病気で1人、教え子を亡くした。校長となって4年、伝えるメッセージは変わらない。

「つらい、悲しい、挫折したとき、命だけはなくさないでください。逃げても構わない！　もう一度やり直せる。でも、いのちだけはやり直しはありません。絶対、死んではいけない！」

この学校では、生徒が自殺していた。校長の話を聴いて、体育館の全員が泣いた。

誰にでも、生きたなりの「いのちの思い」が必ずある。本気で語れば、相手は感じて動いてくれる。まず校長自身が本気で行動しなければ、何事も成し遂げられない。

◆教育マップを示す

ある中学校校長は、「いのちの教育マップ」を作成した。学年ごとに目指すべき姿と年間計画を定めて全校でいのちの教育に取り組んだ。

いのちに関わる教育を取り入れる機会は、既に数多くある。道徳、保健、総合的な学習の時間、教育講演会、人権、がん教育など。これらを、志を持って有機的に結び付けることが重要である。学校・学年・学級単位で、目標・日程・実施項目を「見える化」する。

その時、校長は方向性と基本を示し、具体的なことは現場にまず任せてみる。任せることにより、教師も児童・生徒も当事者として参加してくれる。

◆家庭にも輪を広げる

ある小学校では、児童が書いた「いのちの授業」の全感想文に、校長と担任がコメントをつづって児童に返した。児童は自宅に持ち帰り、保護者にも感想をつづってもらった。

ある中学校では、PTA全役員が拙著の感想文を1冊のノートにまとめた。生徒は事前にノートを読んで、親と家族の姿がつづられている。

メッセージはただ一つ。

「どんなことがあっても、お父さん、お母さんより、絶対早く死んではいけない」

いじめや自殺、未成年の犯罪等が連日のように報道されている。

いのちを大切にする心を育む根本は、いのちの教育にある。「いのちの授業」が学校に根付くことを願います。

◇

30年度からの道徳の教科書に、私の「いる・つながっている・限りがある・掛け替えがない―といった「感性」を育むことである。

児童・生徒の心は揺れ動きながら成長していく。いのちの教育の成果も、すぐには出ない。愚直に続ける中で、小さな変化が少しずつ教室に生まれるものであろう。あいさつや返事、整理整頓、人の話に心を傾ける姿などで。

いのちを大切にする態度は、普段の生活態度に宿るものである。

焦らず、急がず、「心」を育む

新校長への伝言

6 最終回

学校経営